

茜色（あかねいろ）の空

清少納言が枕草子（まくらのそうし）で「秋は夕暮れ」と言っているように、秋は夕日、夕焼けがひときり美しい季節です。そしてその空の色はよく「茜色」と形容されます。茜は植物の名前ですが、一般的にはその根で染めたわずかに黄みを帯びた沈んだ赤色を言うようです。

大学生の時、東京で「茜口ツジ」というアパートの一室に住んでいました。普通の2階建てのアパートで、なぜその名が付いていたかはわかりません。名前から連想されるような夕焼けの空をアパートから見ることもありませんでした。そもそも東京の都心で美しい茜色の空を眺めたいというのは、漫画「三丁目の夕日」の時代（昭和30年代）ならいざ知らず、無い物ねだりというものでしょう。高村光太郎の詩にも「智恵子は東京に空が無いといふ」との有名な一節があります。

ところでなぜ、夕焼けは茜色に染まるのでしょうか。それは、日中の空がなぜ青いのか、という原理と同じことのように思えます。太陽は沈むにつれて、私たちの真上から横に移動します。そうすると、太陽光の空気層を通る距離が長くなるため、波長の短い青い光は次第に届かなくなり、それまで細かい塵（ちり）の間をすり抜けてきた波長の長い赤い光が、塵にぶつかり散らばり始め、私たちにはその赤い光が満ちた空が目に見えるのです。夕暮れ時には地平線や水平線近くから太陽光が横串をさすように長い空気の層を通して差し込むからきれいな茜色の夕焼けが見られるのです。

全国に数ある夕日スポットの中でも、屋島から見る西の空、瀬戸内海の島影に沈む夕日と静かに燃え立つような茜色の夕焼けの神秘的な美しさは比類なきものだと思います。もちろん「日本の夕陽百選」にも選ばれています。そんな絶景をバックにして、夏の終わりから秋の初めにかけて、屋島山上にて「天空ミュージック」というイベントが開催されました。天下一品の瀬戸内海の夕景、夜景を借景にしたぜひいたくなステージで繰り広げられる上質な音楽ライブが売り物で、毎年好評を博しています。文字どおり天空にいて神々と一緒に音を楽しむような不思議な雰囲気が醸し出されるのです。

「瀬戸の花嫁」の出だしにも日暮れが歌われます。茜色の空が夕波に映る様子は、この地に住む者の一番の自慢で、心落ち着く情景のように思います。